

目 次

平和のための遺書・遺品展—「学徒出陣」80周年— 開催にあたって	1
凡例	
1 日中戦争から太平洋戦争へ	4
渡辺直己／4 田辺利宏／6 篠崎二郎／8 松永茂雄／10 松永龍樹／11 田村正／12 横山末繁／13 池田保生／14 戸谷敏之／15 小倉正大／16 柳田陽一／17 木下浩／18 中村勇／19 中村徳郎／20 永田和生／21 井上淳／23 大島欣二／24 小倉正久／25 奥村克郎／25 長門良知／27 石岡俊蔵／27 北川智／28 宇田川達／29 石下英夫／31 竹内浩三／31 宅嶋徳光／32 上村元太／34 大塚 章／35 浅見有一／36 林 憲正／36	
2 学徒出陣へ	38
深沢恒雄／38 池田浩平／39 吉村友男／40 原 亮／42 岩ヶ谷治禄／44 蜂谷博史／44 海上春雄／47 板尾興市／48 鈴木康三郎／49 長谷川信／50 佐々木八郎／51 渡邊太平／52 大塚晟夫／53 市島保男／54 中尾武徳／56 田中敬治／58 林元一／59 久保恵男／60 鶩尾克巳／61 上原良司／62 小川清／63 茂木忠／64 松岡欣平／65 加田勉／66 山根明／67 中島愛作／68 和田稔／69 林尹夫／70 金綱克巳／71 水井淑夫／72 塩見昭／72 山隅觀／73 西澤肇／75	
3 戦後に	76
関口清／76 丸尾至／77 上藤憲三／78 木村久夫／79 白井成徳／80 稻垣光夫／81	
戦没朝鮮人学生関連資料	82
卓庚鉉／82 韓聖洙／82 廬龍愚／83 趙文相／83	
年表「中国侵略からアジア・太平洋戦争へ」	84
戦時学徒必携「大東亜」略図	85
出品・協力者のお名前	86



1908年(明治41)6月4日生。
広島県出身。

26年(大正15)4月、広島高等師範学校文科第一部国漢学科入学。
30年(昭和5)3月、広島高等師範学校卒業。
31年2月、幹部候補生として陸軍広島歩兵第11連隊に入営、同11月除隊。
31年12月、吳市立高等女学校教諭になる。
35年1月、アララギ会入会。
37年7月、充員召集により、陸軍広島歩兵第11連隊補充隊に入営。
37年11月、天津着。
38年7月、天津から華中に転戦。同年12月、天津に戻る。
39年8月21日、官舍の浸水による石灰爆破により死亡。戦死扱いとなる。
享年31歳。

[前略] 麦畑の荒煙に伏せて遙かに陰鬱な倫鎮の土壠を見る。盛に重機の音がする。八中隊は前面、九中隊は背後に廻つてゐるらしい。七中隊は八中隊に協力。歩兵砲が墓地の陰から猛烈に発射される。空氣を切る弾のひびき、しばらくしての物凄い炸裂、気合いがかかるて兵器も猿のやうに敏捷だ。鉄兜が頭の上でがたがたする。左へ攻撃前進。斜に左方の小部落の横を前進してみると突然城壁の上から野砲の響が起る。斜右後ろにシューーと音を立てて弾が落ちる。第二発、三木中尉が伏せた。自分は依然小隊を率ゐて前進。生れて初めて弾丸の下を馳騒した。感じは別はない。白白とした落ちつきだ。そして物理的法則の中に微妙に動いてゐる人間の小さい存在だ、

渡辺直己

1 日中戦争から 太平洋戦争へ

関東軍は一九三一年、柳条湖事件から満州事変を起こして満州（東北三省）全域を占領、「満州國」を建国した。国際聯盟にこれを否認されると日本は一九三三年、聯盟を脱退、孤立する。次いで日本軍は華北に侵攻、盧溝橋での日中両軍の衝突を利して、日本は一九三七年、全面的な中国侵略を開始する。当初、北京、南京、廣東、武漢を占領したが、中国国民党・共産党等の抵抗は激しく、戦争は泥沼化する。日本は中国の背後に米英ソ聯の支援があるとして、一九四一年、独ソ戦を機に、この包囲を打破して東南アジアの資源と米英仏植民地の占領をめざして「南進」を決定、十二月八日、太平洋戦争に突入する。

戦没学生の遺稿

榴弾と軽機をぶち込んで闖入。傷ついてかくれてゐる老人、女、子供、腹部を銃剣でさされて未だ元気を出していく少年、窓を破ると出て来て抱んでゐる子供を抱いた母親、男は縛して大隊本部へ、女、子供は許してやる。しかし他の掃討班は可成殺したらしい。紅槍匪の部落らしい。しかし掃討は嫌になった。武器も押収して星光を仰ぎ乍ら一里ばかりの部落へ前進。血みどろの経験、あまりに儚い人間の生命、倫鎮部落は俺の頭から永久には

なれまい。

一月十九日

【前略】夜はすっかり明け離れて部落には三角旗がへんぱんとひらめいてゐる。大隊砲が唸り始める。墓地の線に友軍は点々と散開してゐる。所が部落からは寂として応射しない。待つこと三十分。八中隊が右に増加。次いで匪賊なし。掃討せよの命令が来る。欣然として兵の面上にも血の色が浮く。朝日が眩しい。兵五名を率ゐて掃討。地瓜を見つけて食ふ。異変ある家は焼き払ふ。平原の霧の中に真赤な焰がめらめらあがる。……苦しい一ヶ月だった。血の臭に飾られた三十日の難行軍だった。高田伍長としみじみ語る。三十里舗で昼食。雪解けの道を前進。三十里舗、十里舗附近は激戦の後がはつきり見ら

一月十九日
時計未定。今朝は食事も早朝。今月が満月で、日本と朝鮮との月の差が大きい。
もとより奇跡のやうだ。圓鏡を月見鏡と見て、王家舎から西へ二里。大兵連部隊が西撤。探査地で水りこむ。地際と轍小高いおとぎの道がつてゐる。手いらずが済みますやう。帰する手が付かない。
いよいよ難場所南側で敵軍が進んで来る。難場所北側で敵軍が見ええる。此時裏を笠置の村に伏し攻撃準備を終り。敵はすぐ現れる。敵は西へ二里。大兵連部隊が西撤。探査地で水りこむ。地際と轍小高いおとぎの道がつてゐる。手いらずが済みますやう。帰する手が付かない。
いよいよ難場所南側で敵軍が進んで来る。難場所北側で敵軍が見ええる。此時裏を笠置の村に伏し攻撃準備を終り。敵はすぐ現れる。敵は西へ二里。大兵連部隊が西撤。探査地で水りこむ。地際と轍小高いおとぎの道がつてゐる。手いらずが済みますやう。帰する手が付かない。
大兵連の敵軍が進んで来る。手いらずが済みますやう。帰する手が付かない。

れて支那兵の髑髏が散在してゐる。山東軍戦死者合同墓を赤柴部隊長が立ててゐるのも痛ましい。

馬に乗つても疲労する。鳥が無数に飛んでゐる。人間の血に飢ゑてゐるらしい。

一月十九日

渡辺直己『渡辺少尉手簿』

一九三八年二月一日～五月二十五日

三月十一日

思考と云ふ事を極力怖れてゐる自分の意識をふと見出して耐らなく寂寥を感じる。無常とか変転とかがこんなに切実に身に沁みて感じられる事もない。北支聖戦の下にボヘミアン的な深い孤独と興奮と痴呆的状態とが狂ほしいまでに錯綜して来る。死とか絶望とかそんなものはなるべく考へたくない。そして只現在と未来との白白とした瞬間に生きてゐるだけだ。思索を奪はれて野獸のやうな獰猛性に生きて行く生活、時に青い空を見て自己自身を悟る時慄然として来る。

渡辺直己『陣中日記』

一九三七年一一月二三日～一九三八年一月三一日

惨憺たる戦の幻覚に悩む夜は酒のみで長々とぐだを巻きぬけ入りせし新鎮城門には土嚢積みて生々しき血潮が流れて居りき

夥し

権枯れし丘に夥しき墓表立てり此處に悲惨なる攻防が続けられき

あり

吾が生還を知りたる朝は陰暗に生きたる鯛を供へたりと剥すなき掠奪暴行の跡ならむ薬莢が落ち血に染みし上衣が投げすてられたり

抗日ビラ貼りめぐらせる城壁に弾痕著し高唐県城

白々と黄河河畔に朝あけて濟南はいづち遠き山脈

夥しきトーチ力陣を見過して濟南に向ふ道は凍れる

砲撃の跡著じる城壁に抗日ビラが千切れしままなり

○まだ血の滌ヶを奥から上へと鳥群し十日鉢(通)

○戰なりとまし都共に月四日は物はざまひる御里(通)

○鐵兜下で鎧を下す部下と一とトライヒテ争ひて血裏と(通)

○雪残る山際と城壁と被廻(通)天と(通)朝霞中と(通)雪と(通)

○おのぞかし都共に前と(通)鎧を(通)朝霞中と(通)雪と(通)

○朝闇(通)運庭を(通)城壁と(通)陽炎立(通)

△脣と舌と被廻(通)は涙がさすまつて(通)おのぞかし當時(通)

△と(通)假とおのぞかし當時(通)

○そぞのがく(通)宋草(通)煙が(通)昆明湖(通)人(通)降(通)雨(通)白(通)と窮(通)

○國と(通)被(通)て(通)宋草(通)が(通)て(通)政事(通)ト(通)死(通)人(通)吾(通)

未だ血の滲みて臭ふ丘越えて鳥夥し十里舗の道

鉄兜打ち貫かれたる部下を一夜トラックに守りて進撃を

国を傾けてつくりし栄華の前にして頭垂れ居り戦ひ人吾は

未だ血の滲みて臭ふ丘越えて鳥夥し十里舗の道

鉄兜打ち貫かれたる部下を一夜トラックに守りて進撃を

国を傾けてつくりし栄華の前にして頭垂れ居り戦ひ人吾は

渡辺直己『手簿2 ノートブック』

一九三八年五月二六日～七月一六日

九月号歌稿

巧なる日本語の反戦ポスターが堆くありき阜寧の城に

日本兵に告ぐとふ激烈なる文字を城壁にまざまと白く
書き記したり

乃ちヨーロッパ戦(通)アララギ(通)チベキアリナ直(通)城(通)

日本兵と告じと小説(通)ある文(通)と城壁にまざまと白く
書き記したり

入りかけた都共に(通)一連唐(通)を(通)破(通)づけ(通)まき(通)絆(通)

古(通)が(通)傳(通)に(通)ま(通)り(通)そ(通)が(通)肩射(通)ぬ(通)て(通)血(通)と(通)噴(通)き(通)生(通)し(通)ぬ

血糊(通)車(通)水(通)石墨(通)つ(通)と(通)走(通)り(通)さ(通)掠奪(通)ま(通)し(通)家(通)を(通)槍(通)する

磨(通)墜(通)と(通)なり(通)せ(通)え(通)草(通)の(通)兵(通)を(通)殺(通)ま(通)え(通)つ(通)ひ(通)と(通)ま(通)め(通)

長(通)が(通)懸(通)へ(通)と(通)さ(通)れ(通)て(通)敵(通)を(通)反(通)對(通)つ(通)ほ(通)す(通)け(通)き(通)が(通)め(通)し

吾(通)が(通)傍(通)に(通)来(通)り(通)し(通)兵(通)が(通)忽(通)ち(通)に(通)肩射(通)ぬ(通)か(通)れ(通)て(通)血(通)を(通)噴(通)き(通)出(通)し(通)ぬ

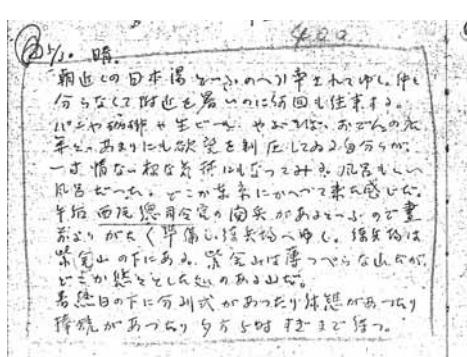
紫陽花(通)に(通)蠅(通)の(通)と(通)ま(通)れる(通)風(通)景(通)を(通)思(通)ひ(通)出(通)し(通)居(通)り(通)ト(通)ラ(通)ック(通)の(通)中(通)に

赤(通)々(通)と(通)部(通)落(通)に(通)暁(通)ける(通)葵(通)の(通)花(通)を(通)麦(通)熟(通)る(通)る(通)花(通)と(通)支(通)那人(通)は(通)云(通)ひ(通)き

匪影(通)なし(通)と(通)鳩(通)を(通)放(通)ち(通)て(通)泥(通)屋(通)に(通)三(通)時(通)間(通)は(通)腐(通)り(通)た(通)る(通)如(通)く(通)眠(通)り(通)ぬ

吾(通)が(通)後(通)に(通)召(通)さ(通)れ(通)て(通)既(通)に(通)死(通)せ(通)る(通)友(通)数(通)へ(通)つ(通)何(通)か(通)は(通)る(通)け(通)き(通)が
如(通)し

〔日中戦争従軍中、華北の東站警備隊長を務めていた時期の作。雑誌『アララギ』一九三八年八月号と九月号に投稿した歌の原稿〕



田辺利宏『戦線日記』

一九四〇年五月

1915年(大正4)5月19日生。

岡山県出身。

30年(昭和5)4月、上京して神田の帝国書院に勤めながら、法政大学商業学校に通う。

34年4月、商業学校を卒業し、日本大学予科文科に入学。

36年3月、同大学法文学部文学科英文科進学、39年3月卒業。

39年9月、広島県福山市の増川高等女学校に勤め、英語と国語を教える。

39年12月、松江にて陸軍入営。後中国各地を転戦。

41年8月24日、中国江蘇省北部にて戦死。

享年26歳。



田辺
利宏

たなべ
としひろ

五月三〇日 晴

【前略】むし暑い夜。一步外の自由の世界。光と愛と憎しみと。我々の遮絶されてゐるいはば影の世界だ。表面我々は強い光の世界だ。逞しい前進の世界だ。しかし我々の精神は陰い。兵隊とは光榮ある囚人の世界に他ならぬいのだ。

(一九四〇年五月三〇日)

秋岡都宛田辺利宏軍事郵便書簡

一九四〇年五月二四日

御手紙有難うございました。

皆様御元気の由何よりです。

小生も益々元気で其後軍務に精励してゐます。

……昨日ははげしい雷雨の日で、一日中物凄い雷鳴が鳴

（手紙有難うございました）

皆様御元気の由何よりです。

小生も益々元気で其後軍務に精励してゐます。

（手紙有難うございました）

皆様御元気の由何よりです。

（手紙有難うございました）

皆様御元気の由何よりです。

（手紙有難うございました）

皆様御元気の由何よりです。

（手紙有難うございました）

皆様御元気の由何よりです。

（手紙有難うございました）

小生も益々元気で其後軍務に精励してゐます。

（手紙有難うございました）

小生も益々元気で其後軍務に精励してゐます。

（手紙有難うございました）

小生も益々元気で其後軍務に精励してゐます。

（手紙有難うございました）

小生も益々元気で其後軍務に精励してゐます。

秋岡都様

（手紙有難うございました）

田辺利宏『従軍詩集』

丘陵地帯の歩哨線に
もう薄の穂が風にひかる。

（手紙有難うございました）

永い困苦欠乏のこの作戦に
いつも思ひ出されるのは

音信の全く絶えた故郷のことだ。
我々の原駐地には

もう束なす祖国からの便りが

我々のかへりを待つてゐることだらう。
音信の全く絶えた故郷のことだ。

荒寥たる生活に堪へてゐる兵隊たちは
もう束なす祖国からの便りが

（手紙有難うございました）

跋た上、唯の赤の花のやうに志られた
我々に静けさと平和とを吹へてくれ。
蛆の薄く屍体と血と蠅よ。
墜ヶ丘の朝日の中へ消えくゆけ。
我々は死境まで火の表紙を聞か。」

丘陵地帯の歩哨線に
もし薄い木が風にかかる。
私も止み叫ねば
（一九三九年二月付）

（一九三九年二月付）

（一九三九年二月付）

（一九三九年二月付）

篠崎 一二郎



1910年(明治43)3月2日生。

奈良県出身。

同志社大学予科を経て、31年(昭和6)、同文学部英文学科進学。

35年卒業。新聞記者記者を希望するが果たせず、大阪市立東第二商業学校の英語科の教員となる。

37年2月、結婚。

37年11月、大阪通信局通信講習所英語科教官となる。

38年4月、補充兵として応召、奈良の陸軍歩兵第38連隊に入営。

38年8月、南京の中支派遣軍岩松部隊司令部付となり、新聞班に配属。のち警備班に配属。

40年1月、前線に配置され、討伐戦に参加。

40年5月、召集解除。

41年1月、女児誕生。

41年8月、再度応召。

41年9月、平壌の尼崎隊に所属。後、南海派遣軍に属し、東部ニューギニアに転戦。

44年1月18日、東部ニューギニアにて戦死。

享年33歳。

篠崎 寿子 宛篠崎一二郎 軍事郵便書簡

一九三九年二月付

第六十一信

戦火よ、昨日の赤い花のやうに忘られて
我々に静けさと平和とを与へてくれ。
蛆の薄く屍体と血と蠅よ。
澄みきつた朝風の中に消えてゆけ。
我々は玲瓈な歴史の表紙を開かう。

丘陵地帯の歩哨線に
もう薄い穂が風にひかる。

秋も近い前線では
ひとしほふるさとが思ひ出されるのだ。

(一五・七・二九)

武村隊は当市より十五里東方の山中の部落にあるが、突然敵主力と衝突、直ちに討伐に移ったが、三日三晩の追撃戦に多数の行方不明と戦死を聞ひたが、本部への情報により、山本大隊だけで八十名近く、中隊だけで二十名と判明、思はず黙冥を捧げました。奥ノ坊、坂本、第三機関銃隊等各々相当出してゐます。今は再起不能に陥つてゐるそうです。お前も朝夕仏前に愛靈を悼んでやつて下さい。今日はそのニュースに哀悼の一日でした。

かくの如くN市を中心江江南地区は旧正を控へ緊張です。敗残兵、土匪、大刀会匪、正規軍、雜軍には閉口で